

講評

高校生作文における複文構造

——外国人・日本人高校生作文と国語教科書の複文の傾向——

本研究を通して、筆者は比較対象とした3者（外国ルーツ高校生の作文・日本人高校生の作文・小学校から高校の国語科教科書に掲載されている説明的文章）の文章の特徴を明らかにした。中でも、外国ルーツ高校生の作文と学校教科書のテ形節の比較分析から、外国ルーツ高校生の作文における話し言葉の影響について明らかにできたことは、外国ルーツ学習者のみならず、初等教育からの日本人学習者の「書き言葉」の習得に関しても意義深い成果だと考える。

本研究ではまた、「外国ルーツ高校生を含む高校生の作文リテラシーの向上には、連体修飾節や節末形式の適切な使用など複文を意識した書き言葉の指導が不可欠」と結論し、作文の具体的指導案や教材開発を今後の課題に挙げている。日本人学習者に限って考えた場合でも、書くことに苦手意識を持っている実態が諸調査から言われている昨今、本研究を土台に具体的な作文指導方法の開発に研究が進展していくことを心から期待している。

（奈良教育大学教育学部 教授 棚橋 尚子）

非漢字圏学習を対象とした字形・音・意味のつながりを意識化させる学習の効果

本研究の目的は非漢字圏出身学習者の漢字学習での形音義の相関の解明である。音符が漢字音と一致する場合に読みの学習効果が高いことは当然のこととして予想されるが、意味の面でも効果が高いことが実験的に解明されている点は興味深い。また形音義三要素を同時に学習する方が二要素の学習より効果的だったという実験も興味深い。これは認知資源の減少というよりも、視覚情報と音声情報が相互に記憶を補うということとして位置づけられ、音符への注目という点も含めて、漢字教育に有益である。

今後は、音と義は漢字単字だけでなく、漢字熟語の学習に関わる点で、熟語としての学習との関連がどうなっているのか、といったことの解明も期待したい。また会意と形声の両側面がある漢字（いわゆる亦声）の場合など知りたいと思った。

（早稲田大学文学学術院 教授 森山 卓郎）

選考委員

尾崎 明人	名古屋外国語大学国際教育連携推進機構長 国際日本語教育インスティテュート長
森山 卓郎	早稲田大学文学学術院 教授
棚橋 尚子	奈良教育大学教育学部 教授
佐竹 秀雄	公益財団法人日本漢字能力検定協会現代語研究室 室長